



2013年5月研究会報告



「35mm二眼レフ」

会員番号810

竹内久彌

研究会報告を担当するようにとのご下命があったとき、たまたま「新カメラ故郷に帰る」でボルシーCを書いていて35mm二眼レフについて少し調べていたことと、それに該当する実機のほとんどを私自身が所持していたことから、35mm二眼レフを今回の研究報告の対象とさせていただきます。

◆ 二眼レフとは

35mm二眼レフは言うまでもなく二眼レフと呼ばれる機種の一つなので、最初に二眼レフという形式のカメラに付いて簡単に触れておきたい。写真用語事典(日本カメラ社刊)によると「二眼レフ」とは、「二眼レフレックス・カメラ」の略であり、「カメラの前面に同一焦点距離のレンズを2個配列し、そのうち1個は撮影用に、他の1個をファインダーと焦点調節用に使う方式を持つカメラのことを言う」と定義されている。後者のファインダーレンズの後方には反射ミラーが45度の角度に置かれて被写体像を正立・左右逆像でピントグラス上に映しだすが、このとき2個のレンズを同時に動かすようにしておけば、撮影レンズで得

られる同じ画像をフィルム上にも撮影できるという利便性があり、ファインダー方式の一つとして実用的に有力な方法であると理解されている。そのため、歴史的にも古く1880年ころから各種のタイプのカメラに適用されていたが、1929年にロールフィルム上に6×6cm判を撮影する新しい二眼レフのローライフレックスがフランケ&ハイデッケ社から発売され、これがロールフィルムという感材にスクエアな画面を撮影するという機構が巧みに構成されて実用性の高いカメラとなっていたために広く一般に受け入れられるところとなり、この方式のカメラが爆発的に普及したことがあるという経緯がある。そして、ローライは二眼レフの代名詞とまでされるに至ったことはよく知られているところである。

一方、二眼レフにはローライで成功をみた120フィルムの6×6cm判だけが採用されたわけではなく、当時のカメラの小型化への流れを反映して、127フィルム(4×4cm判、3×4cm)、135フィルム(24×36mm判、14×21mm判)および16mmフィルム(10×14mm判、12×17mm判)への展開も見られていた。

そのような二眼レフの発展の歴史を見たときに、私の関心を引いたものは135フィルムを使用する、いわゆる35mm二眼レフの存在であった。なぜなら、小型カメラの開発・普及が35mmカメラに集約されていく流れの中で、35mm二眼レフの存在意義がどのようにあり得たかを知りたいと思ったからにほかならない。

◆ 35mm二眼レフ

135フィルムにフルサイズで撮影する二眼レフは35mm二眼レフと呼ばれるが、その種類は決して多くはなく、正式に発売されなかったものを含めてもこれまでに世界中でわずか8機種が存在したに過ぎない。私は幸いそのうちの7機種を所持しているので、以下に、発売年代順に実際の使用経験を含めた各機種の解説を試みたい。

コンタフレックス (Contaflex) (写真1、2)

(ドイツ ツァイス・イコン、1935年)

コンタフレックスは世界最初の35mm二眼レフ(横位置撮影基準)としてあまりにも有名で



写真1 コンタフレックス

電気露出計のカバーを開け、望遠8.5cmの交換レンズを付けてある。



写真2 背面および右側面像

正面から見れば底部の広い安定した外形に見えるが、横から見るとビューレンズの長い焦点距離に対応したミラーボックス部分の大きさと、やや不安定に見える。レンズは標準5cm。

ある。広角3.5cmから望遠13.5cmまでの多種類の高性能の交換レンズが使える。初めて単独ではあるが電気露出計を装備し35mmカメラの自動化の端緒を開いた。二眼レフの利便性を高めるための高度のメカニズムを最高の加工技術で実現していて、カメラとしてのデザインと品質は当時のドイツカメラの頂点にあったと言ってもよい。しかし、コンタックスを二階建てにしたといわれる大型で重いうえに非常に高価であったため決して実用的なカメラではなかった。使いまわしも楽ではないが、極めて鮮鋭な写真を撮ることができる。35mmカメラの究極の目標であった自動一眼レフが完成するまでの途中に現れたツァイス・イコンのフラッグシップ機的存在であったともいえる。それでも4500台が販売されたという。なお、ツァイス・イコンは1959年から同名のコンタフレックス IIに始まる多種類の35mm一眼レフを発売した。

ラッキーフレックス (Luckyflex) (写真3)
(イタリア G.G.S.、1948年)

ごく素直に作られたローライ型のウェストレベル式縦位置撮影基準の35mm二眼レフである。前玉回転による距離合わせ、ファインダー全面をカバーする大型ルーペの採用などの工夫がみられる。スポーツファインダーの使用によっても横位置撮影は当然のことながら決して楽ではない。フィルム巻上げがノブ式のI型とレバー式のII型があった。イタリアで唯一の35mm二眼レフである。レンズ、シャッターなどすべて自社製とされるが、仕上げも写りもそれほど悪くはない。135フィルムの二眼レフへの使用はローライフレックスでも行われているが、本機が35mm専用機として開発された意義ははっきりしない。

ヤルー (Yallu) (写真4)
(日本 ヤルー光学、1949年発売予定のまま中止)

コンタフレックスの普及版を狙ったと言われるが、内部構造などは全く異なる独自の設計がなされたウェストレベル式横位置撮影基準の35mm二眼レフであるとされる。レンズやシャッターも高級なものを備え、カメラデザイン的にも高い評価を与える向きもあるが、遂に正式に発売されることがなかったため、使



←写真3 ラッキーフレックスII
縦長のローライ型。ファインダー全面をカバーするルーペが付けられているが低倍率で使い難い。



→写真4 ヤルー
ダルマ型と呼ばれるこのカメラが意外に大ぶりであることをカメラ博物館に展示されている実機で確認していただきたい。

(写真提供: 田中政雄会員)

用経験などの報告はなく、実用上の評価はできない。なお、このカメラの正式の呼称はメーカーから示されていないので、カメラの銘板に書かれているものを採用した。

ボルシー C (Bolsley C) (写真5、6)
(米国 オベックス、1950年)

すでに発売されていた小型レンジファインダー式35mmレンズシャッターカメラのボルシーBに二眼レフ機構を単純に追加したウェストレベル式横位置基準35mm二眼レフカメラである。もともと一眼レフの開発を目指していたジャック・ボルスキーの巧みな設計で、35mm二眼レフのなかでもっとも小型にできていて携帯に便利である。普通の透視ファインダー、レンジファインダーにレフレックスファインダーと3種類のファインダーを使い分けことができ、その使い勝手は決して悪くないと思う。

トヨカ "35" (Toyoca "35") (写真7)
(日本 東郷堂、1955年)

同一の撮影レンズとビューレンズを横に並べて配置してあるため横二眼と呼ばれる。ウェストレベル式横位置撮影基準のレンズシャッター35mm二眼レフである。東郷堂が戦前に専用フィルムを用いる横二眼の疑似二眼レフとして発売していたメイカイ及びメイス

ピーを、戦後に高級化してヘリコイドフォーカシングの35mm二眼レフとして復活させたものである。大型で重く、横に長い特異なスタイルは、取り回しの上で不利であり、横二眼を採用した使用上のメリットを見出すことはできなかった。

サモカフレックス 35 (Samocaflex 35) (写真8)
(日本 三栄産業、1955年)

ウェストレベル式横位置撮影基準のレンジシャッター式35mm二眼レフで、撮影レンズとビューレンズを上下に配置した、奇をてらわない素直なデザインは好感がもてる。I型では肝心のファインダーに工夫がなく、見やすいとは言えなかったが、II型でスプリットイメージが組み込まれ、セルフコッキングシャッターの採用などようやくサモカ35のシリーズ中の最高級機と位置付けることができるようになった。しかし、左右逆像の小さいファインダー像では広く受け入れられることはなかったようである。

フレキシレット (Flexillette) (写真9)
(西ドイツ アグファ、1960年)

ウェストレベル式横位置撮影基準のレンジシャッター式二眼レフである。撮影レンズとビューレンズを上下に配置しているが、2個のレンズを1本の鏡胴内に入れてヘリコイド移動



写真5ボルシーC

レンジファインダーと透視ファインダーを持つ小型35mmカメラのボルシーBに二眼レフのビューファインダーを乗せたことがわかる。



写真6コンタフレックスとボルシーC

向かって右側のボルシーCがいかに小型に作られているかを左側の同じカメラ構成のコンタフレックスと並べて示した。



写真7トヨカ"35"

横幅が広いのは横二眼のためでやむを得ない。





写真8 サモカフレックス 35

ボルシーCのように小型にまとめる努力はあまりされていないように見える。



写真9 フレキシレット(右側)およびカラーフレックス(左側)

基本的な形態を既発売の35mm一眼レフのアンピフレックス、カラーフレックスから得ていることがわかるであろう。



させるところが他の同種カメラと異なる点である。この方法で、先に発売されていたアンピフレックスなどの一眼レフの大きさを変えずに二眼レフを実現している。すなわち、当時まだ完成していなかった35mm一眼レフの欠点を補った意義はあったといえよう。とくに小型化されたわけではないがファインダーにスプリットイメージを採用し、使い勝手は悪くない。



写真10 オプティマ・レフレックス

外形の基本がフレキシレットにあることは一目瞭然である。シャッターレリーズボタンなどがオプティマシリーズの一員であることを示している。

オプティマ・レフレックス (Optima Reflex)

(写真10) (西ドイツ アグファ、1961年)

世界で唯一のアイレベル式横位置撮影基準35mm二眼レフである。フレキシレットのレフレックスファインダーをペンタプリズムファインダーに変えることで、上下左右正像となり、アイレベル専用の二眼レフが初めて作り上げられた。この結果、35mm二眼レフの新しい機構が完成したとまで評価する人もいる。さらに外付け電気露出計と連動させ、すでにオプティマで完成されていたプログラム式全自動露出機構を採用することにより、コンタフレックスが先鞭をつけていた自動化の面でも一歩を進めたことになる。同じアグファで前年に出されたフレキシレットの発展型ではなく、まったく別に企画された二眼レフと理解すべきである。論理的に構成された良質のカメラといえるが、このころすでに一眼レフにクイックリターン機構が完成していて、ブラックアウトしないという二眼レフの唯一の利点は強調されなくなってしまった。ともあれ、実際に使用してみて実用的価値の高いカメラであることは実感できた。

◆ 終わりに

35mm二眼レフは、1935年にツァイス・イコンが実用性度外視で作り上げてしまったコンタフレックスを嚆矢として始まった。その後、間隔を置きながら26年間に7機種が開発されたが、そのそれぞれは他の機種との関連が認められず、その間の機構的な発展もほとんど見られなかった。最後に1961年に二眼レフの欠点が除去されたオプティマフレックスが現れたが、そのときにはすでに一眼レフが完成して二眼レフの出る幕はなくなっていたといういささか悲しい歴史が残されている。ただ、全部で8機種の35mm二眼レフはそれぞれに極めて個性的であり、現在、改めて見てもそれなりに面白いカメラたちではあったといえる。

現在購入できる35mm二眼レフが2機種ある。一つは株式会社 学研教育出版発行の「大人の科学マガジン Vol.25」付録の「35mm二眼レフカメラ」(¥2500)であり、もう一つが株式会社パワーショベル発売の「ブラックバード・フライ」(¥12600)である。いずれもプラスチック製の立派な35mm二眼レフであり、関心のある方には試用をお勧めする。



大人の科学マガジン Vol.25付録
35mm二眼レフカメラ

<http://otonanokagaku.net/magazine/vol25/> より



株式会社パワーショベル発売(Lomo製)の
ブラックバード・フライ(色違い3種)

blackbirdflycamera.com より